学生団体でサーバントリーダーシップが個人の創造性に与える影響の検討

吉金　由伸

我々人間は社会的な動物である以上何らかの集団に属して生活をしており、その代表的なものとして勤める企業や通っている学校が挙げられる。そしてそこで働いたり勉強したり課外活動をしたりしているが、その際に創造性があることによって革新が起こり、我々は今までとは異なる画期的な商品や独創的な解決策を考案できる。その創造性を促進する要因を調査するため企業を対象に様々な研究が行われ、サーバントリーダーシップや組織市民行動が重要だとされてきた。Palominoa & Lara (2020)のホテルを対象に行った研究では、サーバントリーダーの行動を見た従業員は社会的学習理論によってサーバント態度が身につき、それにより創造性が高まると明らかになった。また、Aboramadan, Hamid, Kundi, & Hamalawi (2022)の NPO を対象に行った研究ではサーバントリーダーシップはワークエンゲージメントを媒介して組織市民行動や創造性に正の影響を与えると示唆された。しかし学生団体を対象とした研究は数が少なく、本研究を行うことで学生が創造性を発揮しやすくなり、より充実した学生生活を送ることができると考えた。

本調査は紙媒体と Google フォームを使用したオンラインでのアンケートによって行われた。調査時期は 2 回に分かれ、第 1 回は 2022 年 2 月 11 日から 2022 年 2 月 20 日までオンラインのみでアンケート回答を集め、第 2 回は 2022 年 11 月 15 日から 2022 年 12 月 3 日までオンラインと紙媒体両方でアンケート回答を集めた。調査に参加したのは様々な大学の学生 135 人で有効回答は 96 人分だった。そのうち 50 人が大学祭の運営委員、18 人がバレー部などの体育会や運動系のサークルに所属する学生、28 人が吹奏楽や能などの文化系の部やサークルに所属する学生だった。全回答のうち男性は 48 人、女性は 42 人、答えたくないと回答したのは 6 人で平均年齢は 19.92 歳だった。また、質問項目は企業を対象にした先行研究の項目を学生団体に当てはまるように言い換えたり、不要と思われるものは適宜削除した。分析の際には EZR や HAD を用いて相関係数を調べ、理論モデルの検証のため媒介分析を行った。

その結果、サーバントリーダーが周囲の人たちの要望を聞き入れそれを叶える様子を見た人は、自身も周囲の人に対して奉仕をしようという気持ち（サーバント態度）が芽生え、実際に困っている人を助けるなどの組織市民行動を起こすようになる可能性が明らかになった。そして組織市民行動を起こす際に他者の視点を取り入れることになり、それが創造性を発揮する要因になる可能性が示唆された。このことから学生団体に所属する学生は、リーダーの立場の場合は周囲のメンバーの考えや行動を意識して奉仕することを念頭に置くと、その影響からメンバーは他人のために自主的に行動し結果として画期的な案を考えることが促進されると示唆された。メンバーの場合はまずは心理的に周囲の人に奉仕しようと意識することから始め、それがやがて実際に行動に移り、結果として創造性が高まり自分にとっても周囲にとっても利益となる画期的な制度や企画を作りやすくなり学生生活がより充実することが示唆された。

本研究の課題として Palominoa & Lara (2020)の研究とは異なり、サーバント態度が創造性には有意な因果関係を持たないという結果が得られたため、それがサンプル数の少なさによるものなのか、別の要因によるものなのかを調べるために十分なサンプル数を集めたり、モチベーションなどの考えられる要因をアンケート項目に追加し更なる調査を行う必要がある。（安全行動学）